飛騨・高山

残したい想いと風景

高山市朝日町

朝日町青屋　大工
上牧（かみまき）　忠敏（ただとし）さん

ご先祖様から受け継いできた
青屋の祭と登山道
守っていくのは大変やけど
末長く続いてくれると嬉しいな

青屋の宝を守って

高山市朝日町青屋で生まれ育った上牧忠敏さんは、家業の大工として働きながら、地域の神社に伝わる「青屋獅子」と祖父が作った「乗鞍青屋登山道」を守ってきました。

柔らかく舞う女獅子

青屋獅子は「伊勢神楽獅子」というもので、男性が女形を演じるため「女獅子」とも呼ばれています。6つの演目が現存しており、曲によって舞う人数や手に持つ道具、表現する光景もさまざまです。

地域の過疎化が進む中、コロナ禍で4年間できなかったことも重なり、存続が心配されています。

青屋獅子

青屋神明神社に伝わる
しなやかな伊勢神楽獅子

男性の舞い手が、大人は黒留袖、子どもは女の子用の着物を着て女装します。
中腰や内股でいかに女性らしく見せるかが腕の見せ所です。

150年ほど昔、隣町の久々野にある反保（たんぼ）という地域から伝わったといわれています。

6つの演目が現存

剣（つるぎ）の舞
必ず最初に披露する舞。悪魔祓いの意味があり、剣を持って1人で演舞します。

短い幕切（まっきり）　長い幕切
曲は同じ。「短い幕切」は速いテンポで「長い幕切」は遅いテンポで舞います。

鈴の舞
鈴を鳴らしながら1人で演舞します。

洞入り
40分程の長い演目。獅子が洞穴から外に出てへんべ（蛇）を取る様子や体のノミを取る様子を表現します。

段獅子（だんじし）
獅子頭を両手で持ち、芋を掘る様子を表現します。

このほかに「八百屋お七」など継承されず途絶えてしまった演目もありました。

行列が集落をまわり、御旅所で獅子舞を披露します。帰り道には粗末な扮装をしたひょっとこが行列の先に飛び出し見物客にちょっかいをかける「おかめひょっとこ踊り」も披露されます。

太郎之助翁の功績

重い石仏を運ぶ苦労

高山の職人に作ってもらった石仏を大八車でひいて美女峠を越えました。
友人や地域の若者、時には登山者の協力を得て、背負って登山道へ運び上げました。

友人の森畑久次と高原梅蔵の協力を得て手作業で笹を刈り、４年がかりで登山道を完成させました。

かみまき　たろうのすけ
上牧太郎之助
安政6(1859)年
～昭和14(1939)年
旧青屋村産まれの大工

悲願の登山道

朝日町寺澤（てらざわ）に、「乗鞍青屋登山道」の入口があります。上牧太郎之助が乗鞍へ登る道を作ろうと決意したのは明治28年のことでした。

壮大な計画に周りはあきれましたが、熱心に２人の友人を誘い３人で笹を刈り始めました。

最初は家から通い、遠くなると小屋を建てて泊まり込みで作業に熱中しました。測量機もない時代、雪で笹が埋もれ、雪面が固くなり歩きやすくなる春先に、山の木に目印をつけておき、雪が解けるとこれを頼りに道を伸ばしていきました。

３年目の夏に念願だった美しい湿原「千町ヶ原」に到達し、明治32年の夏にはとうとう頂上に立つことが叶いました。

祈りの石仏

その後、若くして妻を亡くした太郎之助は修験の道に入り、登山道に安全祈願の石仏を置こうと思い立ちました。寄付を集めて石仏を作り、88カ所に176体を安置しました。

戦後、乗鞍の畳平まで自動車が乗り入れられるようになると、この登山道を使う人はいなくなり、石仏の多くが土や笹やぶに埋もれてしまいました。

平成15年、当時の朝日村が再び整備を行い「太郎之助みち」として復活させました。また、所在不明の石仏を探す「88作戦」という試みで多くの石仏が発見され、今もその場に安置されています。

いま、伝えたいこと

（文・絵）大森貴絵
（企画）高山市

青屋獅子は小学生から中学生までの子に教えるんやけど、**少子化が深刻**や。今は保育園児を入れても子どもが４人しかおらんのやさ。例祭も人手不足で祭が成り立たんようになっていくのは残念やけど、簡略化も考えながら続けとるよ。

せっかく太郎之助おじいちゃんが苦労して作った道は、末永く通ってもらいたいな。すぐに笹が生えるで手入れが大変やけど、**お地蔵さんも登山道も守っていって欲しい**な。

©2023 高山市デジタルアーカイブ